

氏 名	大野ロベルト 准教授
こんな研究 をしています	古典を中心とする文学の研究をとおして、日本の言葉や文化がどのような仕組みを持ち、どのように発展してきたのかを考えています。また、近現代における古典文学の受容や、翻訳による海外への越境などについても研究しています。
こんな成果 を挙げてい ます	・「英語圏における『土佐日記』受容史の概略(戦前編)」『異文化』23号、2022年、153-185頁。 ・『Butoh 入門』(共編)文学通信、2021年。 ・「『土佐日記』英訳ことはじめ」『日本研究』62号、2021年、69-91頁。 ・“Circle within Walls: A Comparative Study on Poets of Leprosariums,” in <i>Recent Scholarship on Japan: Classical to Contemporary</i>, Cambridge Scholars Publishing, 2020, pp. 57-74. ・『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019年。 ・“À la maison de Shibusawa: the Draconian Aspects of Hijikata's Butoh,” in <i>The Routledge Companion to Butoh Performance</i>, Routledge, 2018, pp. 71-77.
ほかに、こん なジャンル に関心をも っています	文学理論を援用してテキストを分析することを続けて来たため、様々な表現や文化の事象を幅広く、理論的に検討することに関心があります。 文学に関しては古典だけでなく、明治期から昭和期までの近代文学はもちろん、フランス文学やドイツ文学にも親しんで来ましたので、世界における日本文学の位置というものにも関心があります。 また、文学と権力(例えばハンセン病文学など)、言葉と身体(能や舞踏など)といったテーマについても興味を持ち、研究しています。
こんな授業 を行なって います	「多言語相関論 IIA・B」 パロディという汎用性の高い概念を介して日本文化の特徴を抽出したうえで、それを異なる時代や文化の場合と比較検討するというプロセスをとおして、論理的に思考する技術を身につけます。 パロディは言うまでもなく笑い結びついており、研究という堅いものとは対照的なイメージがありますが、おそらく笑いは人間にゆるされた最も高度な行為の一つです。笑いについて考えることは、人間について考えることなのです。
学会や社会 でこんな活 動をしてい ます	求めに応じて、展示や番組づくりに協力しています。例えば、紀貫之をとりあげたNHK「知恵泉」では、講師役として出演もしました。 また、翻訳研究の実践として、大野露井という筆名で海外の文芸作品を翻訳紹介しています。業績にチェンティグローリア公爵『僕は美しいひとを食べた』(彩流社、2022)、サックス『魔宴』(彩流社、2020)、フェルサン『リリアン卿』(国書刊行会、2016)などがあります。
私が思う多 文化的かつ、 インターカ ルチュラル な人物	専門の観点からも、ぜひ紀貫之を挙げたいと思います。大陸の文学である漢詩を消化しながら、日本独自の表現の地平を切り拓いた貫之のような歌人たちの活躍がなければ、現代の私たちの言葉や世界観はまるで違うものになっていたはずです。結局のところ、文化を守り育てることができるのは、異文化に心を開くことのできる人々なのです。